

出エジプト記20章4-6節による説教¹⁾

(1935年3月26日火曜日夜八時、ジーゲンの
ニコライ教会における第二回自由改革派教会会議の開会礼拝にて)

カール・バルト

天 野 有 (訳)

⁴ きみは、自分のために、いかなる像をも造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、あるいは地の下の水の中にあるもの、の何らかの写しをも造ってはならない。⁵ きみは、それらを拝んではならず、それらに仕えてはならない。というのも、わたし、主、きみの神は、熱心なる神、すなわち、わたしを憎む者には、父祖の悪行を子らの三代、四代に至るまで報いるが、⁶ わたしを愛し、わたしの誠めを守る者には幾千代に至るまで憐れみを行なう神、だからである。

1) In : K. Barth, Predigten 1921-1935, hrsg. von H. Finze (KBGA), Zürich 1998, S.428-440. なお、われわれのこの底本は K. Barth, Fürchte dich nicht! Predigten aus den Jahren 1934 bis 1948 (K・バルト『汝、恐れるな! — 一九三四-一九四八年の説教 —』), München 1949, S.84-93 に依拠しているが、その際、『全集』編者によって、他の版の言わば異読についても適宜注が付されている。すなわち、当該会議の「すべての講演と決議」を含む「小冊子」である Zweite Freie Reformierte Synode in Siegen vom 26. bis 28. März 1935, im Auftrage des Synodalvorstandes hrsg. von K. Immer, Wuppertal-Elberfeld o. J. [1935], S.5-11 (『一九三五年三月二六-二八日、ジーゲンにおける第二回自由改革派教会会議』教会会議役員会の委託により K・インマー編集、ヴッパータール-エルバーフェルト、発行年の記載なし [一九三五年発行], 五-一一頁), である。以下では、訳者の判断により (つまり、いかにもバルトらしいと感じられる場合) その異読を採用することもあるが、それについては一々断わらない。

愛する^{ゲマインデ}教会の皆さん！ 過ぐる日曜日，ラインラントおよびヴェストファーレンの私たちの告白^{キルヒエ}教会²⁾のすべての説教壇で，第一誡について説教がなされました。すなわち，「わたしは主，きみの神だ。きみは他のいかなる神々をもわたしの傍らに持ってはならぬ」〔出エジプト記二〇2-3，申命記五6-7〕。私たちが今しがたお聴きした第二誡は，聖書そのものによって，今日，私たちの手に与えられております。それは，われらが時代にとって特に必要であり救いに満ちたものとして，かの日曜日，私たちの肝に銘じさせられた〔第一誡に関する〕認識，— この認識を，解き明かし深め強固なものとするため，であります。そしてまた，私たちは，試練と闘いのこの時に— しかしまた神の言葉から生じる大いなる慰めのこの時に— われらが自由改革派教会会議を開くにあたり，これを，古の日々にまさにわれらが改革派の父祖たちにかくも特別切実に語りかけてきたところのまさにこの^{テキスト}聖句のもとにご一緒に身を^{かが}屈める，ということ以上に良き仕方^{アンバー}でなしうるでありますか。

神の諸々の像^{グライビンス}や写し— 私たちが自分たちのために造ってはならず，^{アンバー}挿んではならず，仕えてはならないそのような像^{グライビンス}や写し— というこで，聖書は，まずは疑いもなく，金で^い鑄られたあの子牛のごときもの，のこを理解しております。それは，アロンが〔モーセが戻って来るのを待ち切れずに〕いらついているイスラエルの民のために，神がその僕モーセに十誡を— そしてその中^{しもべ}にあってまさにこの第二誡を— 啓示し給うたその同じ時間に，造ってしまったあの子牛，です〔出エジプト記三二1-6〕。それゆえ，石や木や金や銀やガラスやそういった類のものから，天にあり地にあり地の下に^{フォアビルト}ある何らかのお手本^{ビルト}に従って，神の— 目に見える— 諸々の像^{ビルト}を造り出し，そうしてこれらの像に^{フェアエーレンク}神的敬慕を示す，ということ。これが，この誡めによって私たちに禁じられていること，であります。そのような具合に，われらが改革派の父祖たちもまた，^{パーブストナーム}教皇制との自分たちの過酷な戦いの中で，この誡めをまずは理解したのでした。私たちが旧約聖書のかくも多くの頁で

2) 以下，「教会」の原語は，特に断わらない限り，Kirche である。

遇するあの聖なる驚愕の、しかしまたあの聖なる嘲笑・あざけりの幾ばくかをもって、かれらは、ローマ〔・カトリック〕の教会堂や礼拝堂の中にあるイエス・キリストの、マリアの、諸聖人の種々の像に対峙し、そしてまた、そこでそれらの像に捧げられている奉仕に対峙したのでした。かれらは、「ここでは、これらの像に対しては単なる敬慕^{フエアエーレンク}がなされているだけであって、第二誡で禁じられているあの崇拜^{アンベートゥンク}がなされているわけではないのだ」などというあまりに^や瘦せこけた説明³⁾には満足できませんでした⁴⁾。そしてまた、「これらの像は、場合によっては、何らかの教育的価値を持つものではないだろうか。これらの像は、聖書を読むことのできない一般信徒の書物として容認されうるのではないだろうか」との巧妙な問いに対しては、かれらは、そっけなく、かつ断固として、〔ハイデルベルク〕教理問答第九八問の中で、こう答えたのでした。「いいえ。私たちは、ご自分のキリスト教徒が、物言わぬ偶像によってではなく、ご自分の言葉の生ける説教によって教育されることを欲し給う神よりも賢かるべきではありません⁵⁾」と。こうした態度決定が今日に至るまで己れの心から離れずにいる、ということのない者。こうした態度決定が己れの内では絶えず繰り返し生き活きとしている——しかも何らかの教派的思いつきとしてなどではなしに、旧約聖書および新約聖書の全体に真に拠り所を求めることの許されているようなキリスト教的認識の必然的告知として——、ということのない者。そのような者にとっては、自らの改革派的出自と責任は、奇妙にも疎遠なものとなってしまっているに違いありません。私たちはそれゆえ、ルター派のわれらが兄弟たちに対しても、時に応じてこう繰り返し問うのを容易くやめることはできないでしょう。「そもそもいかなる許可によって、あるいは、いかなる誠めに基づいて、あなたがた

3) これについては、例えば『宗教改革著作集 14 信仰告白・信仰問答』教文館、一九九四年、五九二-五九三頁（注91）を参照。

4) 例えば、J. Calvin, Inst. I, 11, 11. 16; 12, 3（ジャン・カルヴァン『キリスト教綱要 改訳版 第1篇・第2篇』渡辺信夫訳、新教出版社、二〇〇七年、第1篇第11章11（=一九頁）、16（=一二四-一二五頁）、第12章3（=一二九-一三〇頁））を参照。（『全集』編者注）

5) 『信条集 前・後篇』前篇、新教出版社、一九九四年（復刊）、二七二頁および前掲『宗教改革著作集 14 信仰告白・信仰問答』三三五頁参照。

は、私たちの主にして救い主である方の——手で造られた——像を、是が非でもあなたがたの祭壇上に見ることを欲するのですか」と。他方また、ありとあらゆる聖書の描写や象徴的描写を携えた色とりどりのステンドグラスを会堂内に^{しつら}設置することによって、自分たちの礼拝の美しさやら^{エフ(カリヨヒカイト)}宗教心やらの高揚を期待するような改革派の諸教会さへ依然としてなお存在するのであれば、それらの教会に対しては、きわめて明瞭に、こう言われるべきでしょう。「そうしたことによって、あなたがたは少なくとも、度し難いほどの無思慮という咎を犯しているのですよ」と。そして、「あなたがたの中心にあるこうした豪華絢爛とはそもそも一体何なのか、ということを根本的によく考えてみるべき契機を、あなたがたは少なくともお持ちなのですよ」と。

しかしながら、第二誡で禁じられている像とは、聖書の意味においては、単に、手で造られた像——^{ジヒトバール}身体上の目でもって見える像——というものではありませんし、そして、われらが父祖たちの意味においてもまた単にそういうものではありませんでした。第二誡⁹からして語りかけてくる神的〈憤り〉(Unwille)は、人間の芸術に対して、地上の物質に対して、天にあり地にあり地の下にあるあの諸々のお手本に対して、かくして、^{フォアビルト}見えることそれ自体に対して、^{ジヒトバールカイト}向けられているのではないのです。一体全体、己れの衝動と欲求によって、自分自身と他者のためにそうした^{ジヒトバール}見える〈神の像〉を造るよう誘われてしまうところの人間、とは、何なののでしょうか。そしてまた、——かしこでイスラエル人たちがアロンに対してそうであったように——この人間にそのことのゆえに感謝する人間たち、そうした^{ジヒトバール}見える〈神の像〉を——何らかの口実や肩書のもと——^{フニアエーレンツ}宗教的畏怖・愛・敬慕の対象となしうる人間たち、とは、何なののでしょうか。実に、こうした人間たちのありさまとは、明らかに次のようなものです。つまり、かれらは、己れの心と理性の中で、神のことをとてもよく知っていると思っているので、そうした神に関する己れの内面にある見方を、^{ジヒトバールカイト}今や、外面的可視性へと押し出すこと——もし

6) 直訳は「この誡め」だが、内容的には第二誡を意味しているのでこう訳す(以下同様)。

くは他の者らによって押し出してもらおうこと——もまた可能かつ必然だと見なしているわけです。

「イスラエルよ、これがお前をエジプトの国から導き出したお前の神々だ」〔出エジプト記三二4⁷⁾〕。こう民が叫ぶのを私たちは聞きます。それは、あの鑄造された子牛が——すべての参加者の心からの献身に支えられて——アロンの手のもとで出来上がり、今や遂に見事な出来栄でかれら皆の前に立った時のこと。この子牛は、まず最初は、かれらの心と頭の中に、自分勝手に形づくられた神の^{ゲシュタルト}形姿⁸⁾として——自分たちが認識しかつ持っていると思っていたまさにそのとおりの神の^{ゲシュタルト}形姿として——立っていたのです。見よ。この^{ゲシュタルト}形姿に対してこそ、つまり、外面的像がそこにある遥か以前にすでにそこにある^{ゲシュタルト}形姿、外面的像を初めて可能かつ必然的なものたらしめる^{ゲシュタルト}形姿、——まさにこの^{ゲシュタルト}形姿に対してこそ、第二誡からして語りかけてくる神的〈憤り〉(Unwille)は、まず第一かつ本来的に向けられているのであります。この^{ゲシュタルト}形姿こそが、主にとって忌むべきものであるがゆえに私たちが捨て去るべき偶像、であります〔申命記七25〕。第二誡は私たちすべての者に——私たち改革派の者にも——関わっている、というこの事態を私たちは今やすでに見ております！　そうです、イスラエルの民もまた、後には種々の外面的像を捨て去ったのではありますが、〔しかし〕今や、神の律法を手にしつつ、或る内面的な〈神の像〉を己れのために造り、この内面的な〈神の像〉をもって、以前に劣らぬほど重大な仕方第二誡を犯したのであります⁹⁾。私たちは、そのことを知らないともいえるのでしょうか。すなわち、あのよう^{ゲシュタルト}に神を或る^{ゲシュタルト}形姿へと自分勝手に形づくっている、ということ。かくして、

7) ここで原語(ヘブライ語)「エロヒーム」が「神々」(複数形)と訳出されている文法上の理由については当該個所の岩波訳の傍注参照。内容的・神学的理由については、(例えば)本文でバルトが述べるとおり。因みに、七十人訳は「神々」と訳出しているが、これについては、秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書 II 出エジプト記』(二〇〇三年、河出書房新社)の当該個所(とその傍注)および Septuaginta Deutsch. Das griechische Alte Testament in deutscher Übersetzung, hrsg. von W. Kraus u. M. Karrer, Stuttgart 2009, zweite, verbesserte Auflage 2010 を参照。

8) 「形姿」(Gestalt)については、バルメン宣言第一テーゼに関する天野有編訳『教会と国家 I』(バルト・セレクション4)、新教出版社、二〇一一年、三三〇-三三一頁注34を、更に、同三四三頁、四二五頁注14を参照。

その^{ゲシュタルト}形姿において、私たちは——誠心誠意——、神を、私たちの神たらしめることを欲するのであり、その^{ゲシュタルト}形姿において、私たちは——私たちの心の衝動と欲求によって——、この神を^{アンペーテン}拝みこの神に仕えることを欲するのであります。私たちは、自分たちのことをこの点で、本当に、異教徒やカトリック教徒よりも大目に見る〔ことができる〕のでしょうか。私たちは全くよく知っているのではないのでしょうか。人間は、己れ自身の^{ヴ ァ イ ツ ツ}機知才覚から生じる神の^{ゲシュタルト}形姿に対して、諸々の^{ジヒトバール}見える像におけるのとはなお全く別の表現をも——そして、今日にあってはひょっとすると遥かに効果的な表現を——与えることができるのだ、ということ。その表現とは、すなわち、原理、思想構造と体系、^{プログラム}計画と綱領、夢とイデオロギー、であります。これらのものを、私たちは——神の誉れのために——構想し打ち立てるわけですが、しかし、私たちが「神」と言うときに考えているのは実はこれらのものなのです。これらのものが、つまりは、私たちが密かに自ら形づくったまさにその^{ゲシュタルト}形姿、であります。ですから、私たちは、シナイ〔山麓〕のイスラエルがかしこで行なったのと全然違わないことを行なっているわけです。私たちは全くよく知っているのではないのでしょうか。人間が、神の被造世界を——天と地^{ヨミ}と黄泉 (Unterwelt)¹¹⁾を、自然と歴史を——、《人間が己れの愚かさの内に認識していると思っっているそれら〔被造世界〕の^{ゲシュタルト}形姿を、或る神——つまり人間が己れの心と頭の中で己れ自身のために造り出しているところの神——の^{フォアビルト}お手本に仕立て上げる》というようなことのために悪用するとき、それがどうということなのか、を。こうしたこと〔=悪用〕は、私たち改革派の者らの間では、他の者らより、もっと少ないのでしょうか。一体私たち〔改革派の者ら〕の内の誰が、こうしたこと〔=悪用〕に対する——それゆえ、第二誌

9) この一文の指摘する問題が意味するところについては、本説教の約半年後の講演「福音と律法」(天野有編訳『教会と国家Ⅱ』(バルト・セレクション5)所収予定)のⅢ. 福音と律法の現実性(特にそのA-1.「罪の欺きの道具」とされた律法)を参照!

10) 天と地(および両者の関係)については天野有編訳『聖書と説教』(バルト・セレクション1)、新教出版社、二〇一〇年、四四三頁注11を参照。

11) 「黄泉」については『旧約新約 聖書大事典』(教文館、一九八九年)の「陰府、黄泉 Totenreich, Unterwelt」の項参照。

への違反に対する — 罪責の告白をしないですむというのでしょうか。たとえその者が磔刑像や絵画の施されたステンドグラスに対して徹底的嫌悪を抱いているとしても、です。

さて今や私たちの注意を惹かざるをえないのは、まさしくこの誡めに — 第一誡や第三誡ではなく、この第二誡に — 対してこそ、あの特別な基礎づけが、つまり、警告と約束という性格を持った基礎づけが付け加えられている、ということです。そして、もしかしたらそうした基礎づけが、なぜ私たちの改革派の父祖らがまさしくこの第二誡によってこそ自分たちがかくも直接的に撃たれ、かくも切実に要求されていると感じたのか、を説明する一つの理由だったのかもしれない。その基礎づけとは、こうです。「というのも、わたし、主、きみの神は、熱心なる神、すなわち、わたしを憎む者には、父祖の悪行を子らの三代、四代に至るまで報いるが、わたしを愛し、わたしの誡めを守る者には幾千代せんだいに至るまで憐れみを行なう神、だからである」〔出エジプト記二〇5b-6〕。このような追記によって第二誡が激しく強調され際立たせられている、ということ。これは疑いありません。例えば誰かが私たちに向かって、「外面的・内面的な仕方で〈像を造ること〉や〈像に仕えること〉を巡る問題全体は、〔いわゆる〕福音的自由の領域、つまりそこでは、神の誡めではなくて、個々人の良心が決断すべきである、そのような領域に属しているのだ」などとでも言おうものなら、その人に対して、私たちはこの〔基礎づけの〕言葉を突きつけて、こう反問せねばならないでしょう。「この基礎づけによってこそ、《第二誡は、その遂行に際してはわれわれがいかような態度でもとりうるような偶然的制定では全くない》ということ、むしろ、《第二誡に対するわれわれの服従かそれとも不服従か、ということと共に、或る決断が、すなわち、そもそもこれ以上に重大かつ責任の重い決断など到底考えることの不可能であるような決断が、下されることになる》ということが、明瞭に言われているのではなからうか」と。ここで不服従をなす者は「悪行」を犯すのだ、と私たちは聴いております。とはすなわち、その者は生ける神から離れ去っている〔ヘブライ三12〕、そう、その

者は神を「憎んでいる」、ということです。とはすなわち、その者は——きわめて敬虔でありながらも——、根本においては、《神が神では在^{いま}さぬ》ことを、それゆえ、《神などいない》ことを願っている、ということです。そして、ここで服従をなす、ということ。それは、全く一般的かつ原則的に言うならば、主を「愛し」、主の「誠め」を——それと共に明らかに他のすべての誠めをも——「守る」、ということの意味するでしょう。ここでは霊へと蒔かれるか、それとも、ここでは肉へと蒔かれるか、なのであります〔ガラテヤ六八〕。ここでは、教会が建てられるか、それとも破壊されるか、なのであります。そして〔霊へと蒔かれるか／教会が建てられるか、それとも、肉へと蒔かれるか／教会が破壊されるか、という〕そのいずれもが、その都度、単に現在にとってのみならず、むしろ、見通し難き将来にまで及ぶこと、なのです。なぜなら、私たちは、まさしくここでこそ、私たちのあとに来る者たちを「三代、四代に至るまで」、服従か、それとも不服従か、ということへと手引きをすることになるのだからです。ここでは、神の祝福が待ち受けているのか、それとも神の罰が待ち受けているのか、であります。ここでは、この方は、裁き主として行動し給うのか、それとも憐れみ深き方として行動し給うのか、であります。ここでは——きみたち、ご注意願いたいが——、第一誡におけるように〔出エジプト記二〇三、申命記五七〕、この方と他の神々との間の選択が問題になっているのではなく、私たちがこの方に捧げるところの、正しい認識か、それとも間違^{ウンレヒト}った認識か、正しい奉仕か、それとも間違^{ウンレヒト}った奉仕か、が問題になっているまさにここでこそ、そう、まさにここでこそ、「というのも、わたし、主、きみの神は、熱心なる神だからである」と言われているのであります。ここ、まさにここでこそ、この方の怒りとこの方の憐れみとは燃えるのであります。すなわち、私たちは、この方を唯一の真の神としてすでに認識しているということを感じ、唯一の真の神としてのこの方にすでに仕えることを欲している〔＝第一誡〕わけですが、今やしかし、私たちがそのこと〔＝「唯一の真の神」認識と「唯一の真の神」奉仕〕をなさんと欲する際に、私たち自身の考えや意志に従ってそうするのか、それとも、この方の考えと意志に従ってそうするのか、が問われ

ている¹²⁾まさにここ〔＝第二誡〕でこそ、です。「きみは、自分のために、いかなる像をも何らかの写しをも造ってはならない」〔4節〕という誡めは、ここにあって、分かれ目を形づくっているのです。この分かれ目は、教会と世との間を貫き走っているではありません。というのも、哀れなる異教徒が、神の熱心¹³⁾と憐れみとについて何を知っているでありましょうか？ この分かれ目は、教会のただ中を貫き走っているのです。ここでは、あの〔海の中に〕投げ入れられた網が達して捕らえたところの者たちの間で、良い魚が、腐った魚から選り分けられるのです〔マタイ一三47-48〕。だからこそ、そう、だからこそ、ここでは、神の怒りと神の愛とが、同時に、かくも特別高く燃え上がるのであります。

しかしながら、今や私たちは、こう問うことがゆるされているし、また、問わねばならないでしょう。「なぜ、そういうことなのか」と。それゆえ、「第二誡からして私たちに語りかけてくるところの、神のこのような峻厳にして慈愛に満ちた〈意志〉(Wille)とは¹⁴⁾、一体いかなるものなのか」と。これに対して、私たちは差し当たっては、二様のことに注意を払わねばなりません。そしてそれは、神のあらゆる誡めの正しい解釈に際して注意されるべきことなのです。

12) 「神の意志とわれらの願望」(天野有編訳『教会と国家Ⅱ』(バルト・セレクション5) 所収予定) 参照。

13) 「熱心」の原語は Eifersucht で「嫉妬、妬み」の意だが、5節bの「熱心なる神」の「熱心なる」の原語は eifrig なので、それに合わせた。なお、本説教より二十数年後の和解論の倫理学講義では、主の祈りの第一祈願(「御名を崇めさせ給え!」)に内包されたキリスト者の〈生き様〉として「大いなる情熱」(K.バルト『キリスト教的生』Ⅱ(天野有訳、新教出版社、一九九八年、七七節「神の誉れを求める熱心」—「熱心」の原語は Eifer! —の一)について語られているが、その根拠が挙げられる際に第二誡のこの個所も指示されている(同、二五五頁、しかし、二五四-二六〇頁も参照)。

14) 原語は der strenge und gütige Wille Gottes で、明らかにローマ一 22 が暗示されている。同個所のチューリッヒ聖書は Darum sich die Güte und die Strenge Gottes an であり、口語訳は「神の慈愛と峻厳とを見よ」である。

まず第一に。私たちは、「きみは、自分のために、いかなる像をも何らかの写しグライヒニスをも造ってはならない」〔4節〕という誡めを、神のあらゆる誡め同様、私たちの神の一つの言葉として理解しなければなりません。こうして私たちと語り給う方は、見知らぬ御仁ごじんなどでは全然なく、私たちに知られている神¹⁵⁾、なのです。この方は、私たちにここ〔第二誡〕で語り給うところの
ことを通してもまた、ご自身と私たちとの間に何らの溝をも創り出すことなど欲しておられず、それどころか、私たちを、ますます親密にご自身に結びつけることを欲しておられるのです。この方は、私たちを痛めつけることをヴェー・トゥンではなく、元気にすることを欲しておられるのです。この方は、アブラハム・イサク・ヤコブの神で在しいま〔出エジプト記三六等〕、この方は、イエス・キリストの父で在すのです。すなわち、その知恵に——たとえ私たちがこの知恵を理解しなくとも——私たちが依り頼むことをゆるされておられ、その信実トロイユは——たとえ私たちが不信実であろうとも——常に変わるることなき¹⁶⁾、そのような方で在すのです。それはこの方の言葉である、という単純にそのことのゆえに、私たちにここでこの誡めによって証しされているのは、峻厳と慈愛とにおいて、福音——喜びの使信——、であります。

もう一つのこと。この誡めのもつ厳格な「きみは～すべきではない！」¹⁷⁾ということの中には、神のあらゆる禁止命令同様、大層甘美で友愛に溢れたものが隠れております。すなわち、《きみは、自分のために、わたしの様々な像や写しグライヒニスを造りそれらを拝みアンベーテンそれらに仕える、などということのために努力したり興奮したり苦勞したりせねばならぬことはないし、そんな必要はない。「きみはそうせねばならぬ」などと誰がきみに告げたのか。きみは、きみが巻き込まれているそうした辛いつら商売から、自分で背負い込んだしよい苦役から、

15) 「私たちに知られている神」(der uns bekannte Gott) については、例えば、前掲『キリスト教的生』Ⅱ、七七節-二「知られかつ知られざる神」(der bekannte und unbekannte Gott) を参照。

16) Ⅱテモテ二13 参照。

17) 「すべきではない」は、ここでは行文の関係で、「きみは、自分のために、いかなる像をも何らかの写しグライヒニスをも造ってはならない」と訳してきた傍点部分にあたる。

無罪判決が下されているべきである¹⁸⁾。そんなことをしていたとき、きみには、喜びが、成果が、あったか。きみがそんなことに必死に取り組んだことが、きみや他の者らの助けになったか。見よ、今や、あの安息日が明け初めている。そこでは、きみは、そのようなきみの業から離れて安息すべきである¹⁹⁾。「きみは、自分のために、いかなる像をも何らかの写しをも造ってはない」〔4節〕とあるとおりだ》、との大層甘美で友愛に溢れたものが。

そして今や、私たちは〔この第二点目の枠内で〕、第二誠に関する決定的な点を語ることができるし語らねばなりません。すなわち、ご自身を私たちに永遠なる信実トロイエにおいて結びつけ給うたまさにその神は、私たちに、一切の偶像礼拝からの無罪判決を下し給うのです。なぜなら、この方は、神を外面的もしくは内面的に見ようと欲する私たちのあらゆる努力に対して、《われわれは、神を、われわれの関与なしに見ることが許されている》ということでもって、とっくの以前に先手を打ち給うたのだからです。

確かにこの方は、私たちがこの方なしには存在しえない、ということをご存じです。この方は、しかしまた、私たちが何たる被造物であるか²⁰⁾、そして、私たちの手の業なる諸々の身体的-ジヒトバル可視的業や私たちの心と頭の業なる諸々の知的精神的-ガイステイッヒ可視的業がどういったものであるか、ということをご存じです。この方は、私たちが本当のところ、神のことを知ってなどおらず、それゆえ、私たちには——私たちの心と頭をもってしても私たちの手をもってしても——神を模写することなどできない、ということをご存じです。この方は、ご自分が私たち哀れな罪人らによって建てられたこれらの神殿の中には住み給うことがありえず〔使徒行伝七48、一七24〕、それゆえまた、私たちによって、これらの神殿の中で見出されるようなことは決してないであろう、ということをご存じです。

18) バルトの真意をより明確にするならば——本文の次の段落冒頭！——、ここは「無罪判決が下されていることが許されている」とした方がよいであろう。更に、バーゼル刑務所での一九六〇年の受難節説教「きみは許されている！」（前注10の『聖書と説教』四四六-四六九頁）も参照。

19) これは第四誠である。出エジプト記二〇8-11、申命記五12-15参照。なお、こゝも、「安息することが許されている」とした方がよいであろう（前注18参照）。

20) 詩篇一〇三14（口語訳、岩波訳）参照。

そして今や、この方は、このような私たちの^{ノート}困窮を憐れみ給います。そしてそれゆえに、この方は、私たちに、ご自身の永遠なる御子を与えてくださいました〔ヨハネ三16〕。お聴きになりましたか。与えてくださったのです！ それは、何かを自分で手に入れることができたかもしれぬような私たち、ではありません。自分たちのあまりに忙しげな、またあまりに厚かましい指をもって、自分たちのあまりに鈍い、またあまりに鋭い思惟をもって、或る神を——天にあり地にあり地の下にあるものの^{アップビルト}模写として——己れのために^{しゆ}設えたかもしれぬような私たち、ではありません。私たちが神について知っており持っていると思っているところのものが、そこで^{ゲシュタルト}形姿をとったものではありません。そうではなく、そこで私たちにご自身を与えてくださったのは神ご自身なのです。〔私たちが〕見るために？ そうです。実に〔神の〕この永遠なる言葉は、実にイエス・キリストは、^{エーペンビルト}「見えざる神の似姿」〔コロサイ一15〕、「神の栄光の輝き」〔ヘブライ一3〕、と言われているではありませんか。そしてまた、はっきりと、「われらはその〔＝神の言葉の〕栄光を見た」〔ヨハネ一14〕、と言われているではありませんか。しかしながら、この〈見ること〉は、いかなる身体的な仕方で〈見ること〉とも、もしくは、いかなる^{ガイステイッヒ}知的精神的な仕方で〈見ること〉とも、比較されえません。この方ご自身が私たち罪人にここで徹頭徹尾ご自身を与えてくださったまさにそのゆえに、私たちがここでこの方の^{おんめ}御目の前で恵みを見出した²¹⁾まさにそのゆえに、私たちの^{ガイステイッヒ}身体的な目もしくは知的精神的な目が〈見ること〉は、私たちの自分勝手な芸術は、私たちが種々の像や^{グライヒニス}写しに恣意的に触手を伸ばすことは、私たちの頑なな造形は、ここでは寄与することが不可能なのであり、永遠なる御子の^{ジヒトバルモイト}見える姿は、十字架のうちに隠されており御言葉のうちに包み込まれているのです。私たちが聴くとき、私たちは神の御子を見るのです。私たちが神の御子を信じるとき、私たちは、実に自分では見ることの〔でき〕ない神の御子を見ることが許されているのです。この——私たちの功績や関与なしの——〈見ることが許されていること〉が、それゆえ信仰が、それゆえ聴くことが、それゆえイエス・キリストが、〔すなわち〕受肉し十

21) 創世記一八3等参照。

字架へとつけられた神の言葉が²²⁾、私たちに対して一切の〈像を造ること〉や〈像ビルダー・ディーンストに仕えること〉を余計なものとし不可能なものとするところのもの、であります。実に、神の栄光ある自由なる恵みが、私たちが自分で手に入れることのできないものを、私たちに贈り^{ゲート・マッヘン}与えてくれるのです。どうして私たちはそれを、依然としてなお自分で手に入れようと欲するなどということがあるでしょうか。神の恵みこそが——私たちが己れの業でもって悪しきものにしてしまうことを善きものとなし給う^{グーテ・マッヘン}ことによって——、到る所そうであるようにここでも、私たち自身の業を、罪の業として暴き出し有罪判決を下し締め出すところのもの、なのです。いいですか。だからこそ、神は熱心で在^{いま}し、私たちが己れのためにこの方の像や写しグライビスを造りそれらを拝みアンバーテンそれらに仕えることを欲し給わないのであります。《神は、イエス・キリストにおいて、私たちに恵み深く在^{いま}す》²³⁾。これこそが、第二誡における神の峻厳にして慈愛に満ちた意志、であります。もしも私たちがここで服従しないのであれば、私たちは、すでに成し遂げられた和解に反抗し、イエス・キリストを偽り者とし、そしてまた、私たち自身を永遠の腐敗へと突き落とす、ということになるでしょう。

さて、私たちは、以上すべてに対して何と言いましょうか。そうです、私たちは、こうはっきりと自らに言いましょう。私たちの内の誰一人として、——H・F・コールブリュッゲがかつて語ったように——「かくて、きみはその際どう振る舞うのか」と問われる理由のないような者はいないのであり、その上でまた、「上からのあらゆる保証にもかかわらず、私は、神から来ているのではない諸霊あいたいに相対しては、風があちこちに吹き流す葦のような〔フ

22) ローマー〇17 参照。

23) これはバルトに特徴的な言い回しである。例えば、KD II/2,621 (『教会教義学・神論』II/3, 新教出版社, 一九八三年, 九八頁) 参照。『『イエス・キリストにおいて人間に恵み深くあり給う神』という表現は、『和解主なる神』という簡潔な表現の言い換えである』(K.バルト『キリスト教的生』I (天野有訳, 新教出版社, 一九九八年, 一六頁)。また、この「和解主なる神」を主題とする和解論が、創造論と終末論に相対して、「中心的位置・事柄上の優位」(同一六頁)を占めていることについては同一七・二一頁の補説を参照。

ラフラした]ものだ」と己れに向けて答える必要のないような者もないのだ、と²⁴⁾。その時、私たち各々は次のことを考えてみるがいいでしょう。《どんなに私は、己れ独特の仕方^{エーベンゼイト}で、私が御言葉において見ることが許されているあの神の似姿〔イエス・キリスト〕の傍らを絶えず繰り返し通り過ぎて、己れ自身や他の人間たちによって造り上げられ目の前に差し出されている諸々の像——有能で勇敢で敬虔で真剣な生の、あるいはまた、明朗快活で平和的で順調で満足すべき生の像——に向かって急ぎ、それらの像において〈神の像〉^{ビルト}を持つことを欲し、事実また持っていることか、それらの像を^{アンペーテン}拝みそれらの像に仕えていることか、かくして、《どんなに私は、以上すべてのことをもって、私たちの^{テキスト}聖句が語っている神のあの怒りのもとに墜ちてしまっていることか》、を。もしも神の恵みが、そうなることを私たちに対して阻止するほどに、そして、私たちの絶えず繰り返し逃走中の思いや志向を御言葉への服従の中に捕えるほどに圧倒的に力強いものでないのだとしたら、わが友らよ、そのときには、私たちすべての者は失われてしまうのであります。そして、私たちすべての者がここで依り頼むことのできる慰めとは、絶えず繰り返し、次のような慰めでしかありえません。すなわち、恵みは、私たちのあらゆる邪悪さと愚かさとに相對して、事実、圧倒的に力強いものなのだ、と。

そして今や私たちは、われらが日々において、あのほとんど明白となってしまう事実——《ドイツ国民^{フォルク}においては、またしても、自分勝手に描き出された或る〈神の像〉の生産・崇拜・奉仕、のための一つの力強い運動が生じてしまった》という事実——に直面して真剣に驚愕させられております。「またしても」と私は言います。というのも、ドイツ国民というのは、常に、

24) 例えば、H. Fr. Kohlbrügge, Schriftauslegungen, Heft 8: Auslegungen zu 2. Mose Kap. 19 u. 20, 1-11, Elberfeld 1907, S.87-92: 《Fragen und Antworten zum zweiten Gebot》; Zitat: S. 92 (H・Fr・コールブリュッゲ『聖書講解』第八号「出エジプト記一九章および二〇章1-11節の講解」中の「第二誡に関する問いと答え」、エルパーフェルト、一九〇七年、八七-九二頁所収。引用は九二頁)を参照。(『全集』編者注より抜粋)

特別に深遠で創造的な国民だったからです。つまり、この国民にとっては、自然や歴史の中の被造物のお手本に従いつつ、何らかの^{フォアビルト}形姿・^{グシュルト}像・^{グライヒニス}写しへと向かう心の欲求のままに、己れのために己れの神を形づくるという試みが、常に特別身近なものとしてあった、という意味において。今日こうした企てに仕えるものとされている見取り図や種々の材料、といったことについては、私がここで殊更挙げる必要はもはやないでしょう。告白教会は、それらに対して、一つの良き、明瞭にして決定的な言葉を語りました。そして、かの企てに相対しては、告白教会は、この言葉の姿勢のうちに——いかなる事情のもとであれ、また何が来ようとも——留まり続けねばならないであります。

さてしかし、そのことが——望むらくは私たちすべての者にとって——真剣なものであるまさにそのときにこそ、《告白教会がこの新しき^{ビルダージェーニスト}偶像礼拝²⁵⁾に相対して真剣かつ勝利に満ちた抗議をなしうるのは、ただ、自らが——密かにであれ公然とであれ——この^{ビルダージェーニスト}偶像礼拝に關与することを決してしないというその度合いに応じてのみ、であろう》ということ熟慮することが重要であります。もしも告白教会が、そこで問題となっているのとまさに同一の〈神の像〉を、旧・新約聖書から——そしてまたルターへの想起から——取り出された幾つかの特徴を加えつつ豊かにする、ということによってしか己れを他の者らから区別しないのだとしたら、あるいは、その同一の〈神の像〉への^{アンベートゥンク}崇拜や^{フエアエーレンク}敬慕を、他の者らよりもただ幾らか弱々しく、また、ただ幾つかの留保付きでだけ行なっているのだとしたら、その場合、告白教会は、今日第二誡を宣教する——これは今や全力を挙げて起こらねばならないのですけれども——その能力を与えられることはないであります。しかしまた、もしも告白教会が今日この誤謬に対して、人間によって造られた或る別の〈神の像〉——しかもまさに告白教会自身の〈神の像〉であるようなく神

25) 原語の *Bilderdienst* を、これまでは (二回) —— 聖書テキストに対応して —— 「像に仕えること」と訳してきたが、ここはやはり「偶像礼拝」と訳した方がよいであろう。

の像〉—— より以上に良きものを何ら差し出すことがないのだとしたら、その場合にも、告白教会は、この〔第二誠を宣教するという〕課題を果たすための能力を与えられることはないでありましょう。その或る別の〈神の像〉とは、すなわち、州教会の古き理想像もしくは自由教会の新しき理想像、ルター派や改革派の教派主義なる妖怪、あるいはまた、おそらくは没落の定めにあるであろう十九世紀市民階級の道徳や世界観という妖怪²⁶⁾、のことです。これらすべての旗印のもとで私たちが勝利する、などということは、確実ないでしょう。

願わくは、その代議員がこの数日間〔教会会議のために〕ここに集まっている実に私たち改革派の教会においてもまた、あらゆる〈神の像〉を捨て去って—— というのも、今一度言いますが、種々の改革派的〈神の像〉というものも存在するからです——、神を霊と真理とにおいて礼拝する〔ヨハネ四24〕というそのことを、ただそのことのみを追い求める、ということが起こりますように。すなわち、教会と〔ドイツ〕国民^{フォルク}とにおける困窮はただもうあまりに大きいものなので、あらゆる〈神を巡る道楽〉に対して、今やあの安息日^{ノート}²⁷⁾が、〔神の〕言葉のために、告げ知らされねばならないのです。そして、全くただこの〔神の〕言葉のみが—— 改革派の教えによれば—— キリストの教会にあっては支配権を持っているのであり、かくしてまた、この〔神の〕言葉の前に、私たちは、自分たち自身および自分たちの慣習や確信—— 最愛の慣習や確信も含めて—— の存立そのものを、朝毎に新たに吟味しなければならぬのであります。

26) ここで「妖怪」と訳した原語は Gespenst である。この語については、K. Marx/Fr. Engels, Manifest der Kommunistischen Partei, Dietz Verlag Berlin 1967, 1989, 16. Aufl., S. 7 およびカール・マルクス『共産主義者宣言』（金塚貞文訳）、太田出版、一九九三年、四頁、カール・マルクス/フリードリヒ・エンゲルス『共産党宣言・共産主義の諸原理』（水田洋訳）、講談社学術文庫、二〇〇八年、六八頁注1を参照。

27) 前注19とその本文参照。

なおもう一言、全く個人的な言葉を言わせていただきたい。思うに、今晚は告白教会の若き闘士や最も若き闘士もまた、一人ならず私たちの中心におられることでしょう。若き牧師、副牧師、牧師候補生、そして〔神〕学生が。私たち年長者の多くは、その方々が、まさにそのかれらにとってこそかくもこころみ誘惑に満ちた過酷な時代にお示しになったその姿勢を喜んでおります。けれども、きみたちに、ただ一つのことだけ言わせてください。すなわち、きみたちがレヒト闘い、そして最後には栄冠を受けることになるのは²⁸⁾、ただ、きみたちが、まさしくあらゆる〈神の像〉を、とりわけ、神学の〈神の像〉をも — きみたちが私のもとで学んだ神学の〈神の像〉をも —、神の言葉それ自身のために全く自由となるべく脱ぎ捨てるそのときにのみ、なのです。何らかの原理や体系 — それは何と呼ばれようが — の虜とりことなっている者らは、偶像礼拝に対する闘いに耐えることはできません。なぜなら、かれら自身が偶像礼拝を推進しているからです。どうか、きみたち — 私はそうしてくれるようきみたちに頼みます —、きみたちが全くただキリストの仕え手でのみあらんがために、何らかのレヒト正しい神学を通して、神学からも解放されんことを。

以上のすべてはあまりに要求過大でしょうか。そう、確かにそれは要求過大です、教会にとっても個人にとっても、年配者にとっても年少者にとっても。私たちすべての者が、第二誡に逆らいつつ、絶えず繰り返し己れのために様々な〈神の像〉を造り、それらをアンバーテン拝み、それらに仕える、ということ。これは、放たれた石が落下するような必然性をもって、絶えず繰り返し起こっているのではないのでしょうか。

明日は今日とは違った具合になっているのでしょうか。愛する教会の皆さん、明日は今日とは違った具合になっているでしょうし、あの石は落下のただ中であって押しとどめられているでしょう。つまり、もしも私たちが、私

28) II テモテ二 5 参照。この個所については、本説教の半年前にスイスで牧師の集まりのためになされた講演「神の言葉への奉仕」（一九三四年九月）の中で、「信仰の闘い」として説明されている（前注 10 の『聖書と説教』四九-五一頁参照）。

たちに要求されていること——《われわれは、己れのために、神のいかなる像をも造ってはならない》ということ——を、私たちの心と頭との業たらしめるのではなく、イエス・キリストとの私たちの出会い——救いをもたらす出会い——たらしめるならば、〔すなわち〕私たちのすべての罪を赦し私たちのすべての病を癒し給う神〔詩篇一〇三三〕との私たちの出会いたらしめるならば、であります。まことに、この出会いこそが、第二誡との私たちの出会い、でもまたあるのです！ 第二誡に対する服従——それゆえ霊と真理^{ゴッテスダイーンスト}における礼拝——とは、すなわち、主^{すが}に縋りつく、ということです。そのもとには、私たちの一切の功績や威厳なしに、そしてまた、私たちの一切の過失にもかかわらず、恵みが存在する——なぜならこの方は^{アイン・フュア・アレマール}すべてのためにただ一度²⁹⁾、かつ、私たちすべての者のためにその一切を償^{グート・マツ・ヘン}ってくださいましたがゆえに——、その主に。私たちが本当にこの主に縋りつくならば、そのとき、一体どこから私たちは、第二誡によって私たちに禁じられていることを引き続き行なう余地や空気を取ってくるなどということがありましようか。そして、そのときにはまた、どうして私たちは、主のこの誡^{フオルク}めを、至福たらしめる真理として信じ、かつ勝利に満ちてすべての民に宣べ伝える、という喜びと勇気と力を持たないはずがありましようか。

29) 前注 10 の『聖書と説教』四一六頁注 5 参照。